

祭儀と神殿崩壊の記憶が日常に刷り込まれていったのではないか。

マイモニデス『イエメンへの手紙』考察

——共同体崩壊危機の克服——

神田 愛子

『イエメンへの手紙』(*Iggeret Teman*)は、マイモニデス(一三五—一二〇四)がタルムード学院長ヤコブ・ベン・ナタナエルの求めに応じ、一一七二年にイエメンのユダヤ共同体に書き送った手紙である。サラディンに反抗するシーア派が実権を握り彼らに改宗を迫ると同時に、メシアを自称する者が出現したことで共同体は混乱に陥る。共同体崩壊危機に際し、ラビとして彼がユダヤ伝統をどう解釈したかを本発表では考察した。

イエメンへの入植は、伝説では第一神殿崩壊(紀元前五八六年)以前とされるが、三世紀以降の記述では、第二神殿崩壊(七〇年)後に離散したユダヤ人が共同体を構築したらしい。イスラーム化以前のイエメンは五政体に分かれ、このうちヒムヤルの王が三八四年にユダヤ教に改宗したが、五二五年にエチオピアのキリスト教徒により滅亡。五七〇年にはササン朝ペルシャに、六二九年にはイスラーム軍に占領され、イスラーム化した。改宗した者もいたが、多くは改宗せずバビロニアのユダヤ共同体と密接な関係を保ったらしい。アデンが国際貿易港として重視された十一世紀から十三世紀にかけ、イエメンのユダヤ共同体はイスラーム圏の中で重要な役割を果たし、アイユーブ朝(一一六九—一二五〇)下のエジプトのユダヤ共同体とは

固く結束していた。メシア待望の動きはイスラーム化以前からあり、ユダヤ教徒とムスリムが互いに思想的に影響し合ったと見られる。このため、九世紀末に実権を握り、隠れイマームを否定したシーア派一派のザイド派は、メシア待望の動きをユダヤ教徒のイスラーム政権に対する反抗として捉える。アイユーブ朝下のユダヤ人は比較的平穏に暮らしていたが、イエメンの地方総督ムイズッディーン・イスマールがイスラームへの改宗を強制したことで、イエメンのユダヤ人共同体は恐怖に陥る。

手紙の論点は主に三点である。第一に、迫害はかねてから預言されていたが、それはじきに止む。かつては暴力(アマレク人、ネブカドネザル、ハドリアヌスなど)や言論(シリア人、ギリシア人、ペルシャ人)による迫害だったが、今の迫害はその二つを合わせ持ち、より効果的に我々の法を滅ぼそうとするものである。ナザレのイエスは、自分はすべての預言者により約束され神から使わされたメシアだといい、律法を完全に廃棄しようとするがそれは成就しない(ダニエル一一・一四)。もう一人の男(ムハンマド)が彼に続き、命令と禁止による新たな法を真似て作るが、それは自分自身に栄光を帰すためのものでしかない。ダニエル書七章八節の小さな角はこの男のことであり、先の三本の角はローマ、ペルシア、ギリシアである。強制的棄教は主が必ず止められる(BTケトボット三bなど)。第二に、メシアがいつ来るかは誰にもわからない。終末に関しては語ることが封じられ(ダニエル十二・九)様々な見解が生じるが(同十二・四)それらはいずれも成就しない(BTサン

ヘドリン九七b)。イエスやムハンマドはゼカリヤ書にあるメシアだと彼らは主張するが(ゼカリヤ九・九)二人はイザヤ書のロバとラクダに乗る者であり(イザヤ二一・七、九)メシアではない。第三に、メシアが来る話は経験上いつも嘘である。

この手紙は『迷える者の手引き』とは異なり、あからさまにイスラームとキリスト教を批判しているが、当局の手にわたる危険を顧みず、苦しむ同胞のために書き送ったことがうかがえる。また、聖書(特に申命記、イザヤ書、詩編)から多数の約束の言葉を引用し、同胞を励ましている。この手紙がきっかけとなってメシア運動は衰退し、マイモニデスがサラディンにかけあつたことで迫害も止むことになる。共同体のリーダーとして、言葉だけでなく、迫害を止めるため具体的行動を取ったことが注目される。聖句に固く立つようにと語っているが、彼自身も神の言葉に信頼しつつ行動したのであろう。

一九世紀東欧ユダヤ教の危機とハラハー的伝統の革新

市川 裕

ユダヤ教の苦難は、自然災害ではなく異邦人側から受けた迫害などの人災が主題となる。人災は、戦争や暴動あるいは強制改宗などユダヤ社会の破壊を目的とした場合には、生命の危機に直結する。これに対して、本論の事例は、危機であるが、時代の変化に伴う共同体の変容が扱われる。一八世紀末の西欧から始まったユダヤ人解放は東欧にも波及する。そのときユダヤ社会は西欧と東欧で大きな違いがうまれた。それはなぜだったか。

ユダヤ人解放は、近代国家の成立に伴って同等の市民として社会に受容される事態である。これは客観的情勢として西欧に起こり、ユダヤ人の身分は明らかに上昇した。ユダヤ啓蒙主義者などの開明知識人は、これを推進する方向に制度改革を断行し、ユダヤ教自体をキリスト教を模した制度に変更していく。いわゆる改革派乃至進歩派の出現である。西欧ではここからさらに同化、世俗化、キリスト教への改宗が起こった。

これは、ラビ・ユダヤ教始まって以来の最大の「存亡の危機」、内側からのユダヤ教の崩壊の危機といえよう。伝統主義者にとつて、神の啓示法である神聖なハラハーの伝統は、人との関係を律する政治的規定と神と人との関係を律する宗教的規定の両方を包括する法体系である。これがユダヤ人に聖なる身分を与え、苦難に向き合う宗教体制の根幹にあった。市民権を取得することはこのハラハー体制の廃棄を意味したからである。

しかし、西欧では、この同化主義こそが正当性を得てユダヤ人は繁栄を謳歌し、学者、思想家、芸術家、銀行家、資本家を輩出した。西欧のユダヤ人は時代の先端であり、東欧の同胞は時代遅れでカバラーの迷信がはびこる迷妄の世界とみなされていた。ところが、一九世紀末以降、完全に西欧文化に同化した家庭の子弟から、東欧ユダヤ教の伝統主義・ハシディズム・シオニズムの中に、失われたユダヤ精神の源泉を認める人々が出現し、郷愁とともにユダヤ文化を再発見する動きが生じた。

この結果から判断すれば、近代化に遭遇した東西ヨーロッパにおけるユダヤ社会の対応の違いは、ユダヤ教的伝統の存続と